

映画「ウンタマギルー」が、逃げて行く

当山 忠

映画「ウンタマギルー」が、80年代の後半に発表されるというのは、映像の世界ばかりでなく、絵画、写真、芝居、そして大げさに言わせてもらえらば、沖縄でのトータルな創作アートマニュアルと言ったふうなことにまで、刺激的に波及するものとしてとても興味深いものだった。常に表現の悪魔に侵されているアート人間たちにとっては、この映画の封切り時期を考えても、とてつもないレセピー的クワッチーになりうるからである。まさに、90年代に突入して沖縄の艺术的状況に新鮮な素材を見せてくれ、表現の層をとき解いていくために、沖縄のカパの要素がどんな可能性をもっているんだろうかというテーマに一石を投じてくれるものだろうという予感があった。映画「ウンタマギルー」は、1989年度キネマ旬報ベスト10の4位、報知映画賞最優秀作品賞、第40回ベルリン国際映画祭のカリガリ映画賞獲得といった栄誉にかがやき、なかなかの評判なのである。取りあえず、映画「ウンタマギルー」は、成功したのである。ところがどっこい、沖縄に住み続け、沖縄ではどういった色、どういった線、どういったフォルム、どういった…というどういった病に侵されている回路に、この映画をインプットしてみると、なんとも「シゲキナシ」のメッセージ表示が何度も繰り返されるばかりなのである。沖縄独自の(沖縄、沖縄とウルサイナァとキーワードコラム族には、笑われそうな気配であるが…)まだ見ぬ新しい創作に遭いたい願望にウサーッテいる僕などには「ウンタマギルー」は、なぜか物足りなかったのである。90年代という興味深いアートの時代を目の前にして、新しい表現の形をメッセージせずして逃げていってしまったというのが、映画「ウンタマギルー」を観たばかり

の感想だ。全編に漂う60年代から70年代ふうの寺山修司などに代表される地下演劇的ムード、安保世代の表現的暗さ、そういったすでに使いふるされた映画のレセピーを並べたてたのが、この映画だったように思う。映画を観ている間じゅう、ずーっとかかどが痛いと思ったのは、なんとタイクツという名の履物をはかされてしまっていたのだ。例えば、最後のサーターヤーのシーンで、沖縄の日本復帰を宣言する人物がダイナマイトを隠しもち、琉球の寓話的存在、或いは呪術的象徴としての存在である豚の化身を、体ごと吹き飛ばす行為に出るのであるが、それはおそらく復帰とともに沖縄の寓話的意味性、民俗的土着性が消え去っていく



映画「ウンタマギルー」の撮影風景

ことを言いたいのであろう。だが、そういうことは、日常、世界的なうねりのどうしようもない部分なのであり、そんな文化公害を引っ張りだして映像化してみても、全く面白味がないのである。沖縄タイムスの文化欄に「ウンタマギルー」を評価している稿があって「高嶺の試みは、ブタ文化という沖縄の民俗文化の〈土着〉と繋がりが、それを虹豚という〈フィクション〉によって切断し、沖縄それ自体を〈異化〉し照らし出す試みであったように思う。」(1990.1.8)と書いてあったが、なぜ沖縄を〈異化〉する試みが必要なのか分からないのである。沖縄を相対化とか

非帰属化、あるいは差異化などという同類後を並べたて、必ず「敵が必要だ」みたいなところで論戦を張る根拠がわからないのである。そういう言葉は、後からゆっくり付いてくるものであって、机上の思想もどき知識人の物の言い方のイヤラシさがまわりついているように思う。相手を射程距離に置いて、いつも自分たちを〈異化〉したがるのは、手先が器用であるだけで準備されたステージでしか踊らない猿回しの猿みたいなものである。他人を恨むという位置で、又は強者と弱者の関係を作り出し、自分をいつも弱者側に身を置き、ものを考えるというやり方は、もういただけないのである。沖縄を取り巻くあらゆる事象が、決して60年~70年代ふうの加害者と被害者の二極思考では切り開かれていくはずはないことを僕たちは学んだのではなかったのか。沖縄の寓話性の破壊を映像化するより、その寓話性を新宿の歩行者天国や、ニューヨークのセントラルパークなどにもちだしていく、そんなエネルギーのほうがもっと明るい、おいしい可能性が広がるのではないのか。もはやウチナー対本土という歪な料理法では、ヌチグスイのクワッチーを作るには程遠いのである。ところで、映画の封切り前から「琉球映画」なる言葉が、新聞雑誌に頻繁に出るようになった。しかし、この言葉の吸引力からすると、むしろ過去に上映されたある作品の方に興味がそそられずにはいられない。それは故・金城哲雄によって作られた「吉屋チル物語」である。この映画は、一貫してドラマツルギーとして流れる人間の悲哀、女の性が見事に描かれ、ウチナーンチュの感性が捉えた作品である。「琉球映画」という言葉を使うのであれば、そういった優れた映画も思い出ししてほしいものである。(コピーライター)

* 額縁の専門店 *

合資会社 前田額装商会

〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(0988)34-67

国家試験合格者輩出-No.1の総合コンピュータ専門学校

専修学校 CSCコンピューター学院

那覇校 ☎900 沖縄県那覇市山下町103-1 電話(0988)59-0746
中部校 ☎904 沖縄県沖縄市宇室111-1-10 電話(09893)8-1531

コンセプトアートを、超えて 美学の核爆発

ノイズ、気体、液体、固体、情報…。金城満は、一見絵画の素材からかけ離れているように思える事象を、貪欲にかき集める。そして、遺伝子の思考をとつともない時間の中で、直立させたり、あぐらをかかせたりする。美術の新たな地平を目指す氏に語ってもらった。

*GV=ギャラリー・ボイス

GV あけみお展、金賞おめでとうございます。

金城 どうもありがとうございます。

GV 標題は、「ノスタルジー」でしたが、作品について少し話して頂けませんか。

金城 僕が言いたかったのは「体験」ということなんです。単に自分の体験と言うのではなく、永い過去から受け継いできた“血”みたいなもの。それに対するノスタルジーと言えます。遺伝子レベルで考えてほしいんですが、人類発生から35億年たっていますよね。そういう永い時間に対するノスタルジーなんです。

GV 金城さんの最近の精力的な仕事には、びっくりしてしまいます。ところで、学校の教育現場におられる現在、創作の時間はどのようにとっていらっしゃるのですか。

金城 とにかく教師は“忙しい”人種なんだと思います。何もないみたいだけど、何もかもあるようにしてしまう現場なんです。それは仕事自体がシステム化されていないからなんです。ですから、そこに入り込んでしまうと、とてもじゃないが創作の時間なんて皆無ですよ。僕の場合、仕事をシステム化して、ちゃんと整理するようにしています。

GV なるほど、仕事に縛られることなく、創作の場も考えているわけですね。さて、実に興味深い金城さんの作品なんですが、創作上のことについてお聞きしたいと思います。管理社会から逸脱することの必然性みたいなものが、金城さん

の一つのテーマになっているわけでしょうか？

金城 どんなに頑張っても逃れられないものがあつたら、その中で逃れられる部分はどこかと考えるべきだと思うんですね。管理というのは一つのルールですから、まずは受け入れよう。だけど、許される部分は逃れようというわけです。

自分の作品から引用して言うと、わざと枠組を作って、そのどこかを壊すこと



金城 満氏

によって息をしてみる。ところが全体を壊すと、管理慣れしていますから今度は不安になる。よって管理を求めますよね。だから、どこを壊せばより効果的に深呼吸ができるかを考えるわけです。こつち側から、逆にどう管理を笑うことができるか、管理に対する批判が出来るか、ということなんです。

GV グローバルな視点から、社会システムの枠というルールを設けて自己の意識の規律とのかかわり合いがテーマになっているわけですか？

金城 なぜ管理が必要か、なぜ枠組が必要かというのはもう知的な部分でしか理

解できないと思います。

自分の細胞の維持というのは決して自分がしていたわけではなく、自分の先祖がしていたことなんだ。程度の差はあれ、どういう時代であれ、私たちの枠は遺伝子に組み込まれているだろうと思うんですね。だけど隙間のない枠は息が詰まりますから、隙間を意図的に作りたいし、多分意識の助けを借りて枠を壊したいという欲求が起こるんでしょう。しかし根源にあるのは、無意識の世界という遺伝子レベルの世界ですから、簡単にはいかないわけです。

美術というのは、絵を描くのではなく、時間の中で息が詰まりそうな自分というものを感じたいと言うことだと思います。

GV 例えばサガンは、自分の表現するのは「魂の告白」と言っています。時代を生きる無意識の中から出てくる遺伝子レベルの表現欲、イメージを、今を生きる作家が前面に推しだそうとした時、例えば公式を学んで絵画しています、というのはありうることだというわけですね。

金城 公式は、どう使おうといいんだけど、公式を使う必然性がわかってないとおもしろくない。公式のおもしろさというのは、なぜこんな公式になったか分かった時のおもしろさですよ。あの感動の裏にどんな時間が流れているのかその中から材料を持ってこないよね。

美術の新鮮な公式は、美術の中にはないような気がします。変な言い方ですけど、それは他のモノにあるんだと思います。美術の公式は自分の公式を持つための一つの材料でしかないのです。説明付けするのは、とても難しいですけど。

GV 表現する根源みたいなものは、公式を学んだからといって補えられないというか、公式の範中ではとても抱えきれないということでしょうか？

金城 この公式というのは、固定された公式ではなくて動いていくというか、絵を描く上でのテクニックでもあるし、あ

有限会社 **タナカ**
画材専門

代表取締役 田中興八

〒900 那覇市牧志2丁目17番地 TEL. (098)61-7410 沖縄通のダイナミック

絵のレンタルリース！

月々2,000円より

画廊沖縄営業部：☎34-6706

る公式がみつければどういう表現でも負担なく出来ると思います。しかし、超スーパーエクストラというのは、出来ない気がします。というのは、その公式とは、現在感じている物からしか作れないと思うから。過去からは絶対「超」がつくのは生まれえない、そこを壊すことによってしか意外性は生まれてこないでしょう。一つのパターンを足したり、引いたりした所からしか新しいものは生まれてこないと思います。また、そういった実験を常に回転させていかないと、どれが自分の公式なのか、どれが原点なのかわからなくなるし、見えてこないでしょうね。

GV 意味があるようで、ないようなまどろこしい世界というか、多面的な情報があるフラットな面から創作を始めていくわけですね。

金城 いろんな情報が一気に来るもんだから、処理出来なくて不安という信号音が出てくるんです。ピッピッピッ!情報オーバーですという感じですね。

GV 金城さんの作品の中には、いろんな形で情報が含まれていると思います。

それは、一体どこら辺から来るんですか?
金城 私たちは、遺伝子の膨大な情報をもって生まれてきています。それがある信号によってコントロールされて、少しずつ情報が出てくるんです。それで日常生活が出来るんです。それが、ある時期に情報が一気に飛んでくる時があります。もちろん、脳味噌は反応できない。その時に感じるのが「不安」だと思う。現在というのはいろんな情報があり、歪みが出てくる。そこで不安の形としていろんな事が起こる。それと同じように僕自身も遺伝子の中で、情報が一気に出てくる。そして不安になる。いろんな情報が来て、良い処理が出来たとき自分がやさしくなったり、好きになったりするんです。

GV 表現上のテーマというのは、あるんですか?不安を表現したいのか、それとももっと違うものなのか?

金城 不安を表現したい訳じゃなくて逆なんですよね。それから逃れたいから何か表現したいというか。

GV 表現してしまうと、やり逃げたという安堵感みたいな、不安感が解消されたという解釈が創作上あるんですか?

金城 不安を描くことによって不安を解消するという、カタルシストとは少し違う気もするんですね。問題は、まだま



金城 満 「管理社会」

だ解決されませんね。手探り状態と言ったほうが正しいと思います。

GV 金城さんは、実に不思議なコンセプトを持っていると思うのですが、そういう部分というのは、自分の流れのなかでどう位置付けしているのですか?

金城 今までのコンセプトという形が固体だったと思うんですね。物質感があり、手で触れられるし、それを液体的にも解釈できたし、気体的にも解釈できたけど、コンセプトは基本として固体であったらと思うんです。

その時代の把握と、哲学、思想を不変化していくというややこしい作業をここまでフリージングしていく必要があるのか、僕はすごく疑問に思います。そうすると10年前の自分はそうだったけど、今はこうなんだということが言いにくくなってしまいますよね。時間をかけて固めていかないと、たかだか30代でそれに対抗する位の固体を持っているか?と聞かれたらドギマギします。

GV ある意味では、創作の上での年齢的なこともあるわけですか?

金城 それもあると思います。僕の希望

としては、創作、思考、ともにあまり固体化したくないというのがあるんです。年齢的な事も否定はしません。

GV かなり時代的にミニマル化していますが、それに関してはどんな解釈をしていますか?

金城 圧縮にも絶えうる時代そのものが固体の時代だと思います。ウォーホール時代は、大衆という固定化できるものがあつたと思う。概念としての強烈なものがあつたんです。

今、あえて強烈なものというのは、過去が今ある、情報が抽象化している気体感ですね。分子化していった、ゆらゆらしたり、もっと流動的なものに近いと思います。答えを出したくないし、出ない世界なんだろうと思う。それからすると、コンセプチュアルアートは、固体のなんです。

概念的な主張の時代では、もはやありません。それでは、決して普遍性は持ち得ないでしょう。

GV ミニマル化から見ると、新しい流れがあるとしたら何でしょう。

金城 いわゆる、コンセプチュアルアートは、終焉を迎えているわけで、一つのコンセプトでは納められないわけです。僕にとっては、遺伝子が不思議、皮膚が不思議というところから、もっと普遍的な所にいきたい。

GV 表現、美学の領域が方法論において科学的に着眼しなかったわけですね。まるで美学の核爆発ですね。表現は、ミニマル化の中で、分裂、拡散したのでしょうか?

金城 ミニマル化から、宇宙を知るところまで、いけるような気がしています。自然、社会運動も、そういう流れをくまないとダメなんじゃないでしょうか。

GV 先進国も後進国も並列化の時代。全体の生態系こそ、大事なんですね。社会、経済構造もそこから思考できるかも知れませんね。

金城 つまり、僕はコンセプチュアルアートで切り捨てられた部分、学生運動などで無意識化された部分をいじくりたいわけです。整理していく中で、失ってしまったホコリこそ大事なんですね。結局、DNA思考に通じることなんだろうと思います

GV まさに、若い世代はDNAの立場から発想するというわけですね。これからの活躍を期待しています。今日はおもしろい話、ありがとうございました。



Kentucky Fried Chicken.

株式会社 リウエン商事
代表取締役社長 宮城 義明

〒901-21 沖縄県浦添市字勢理密556番地 TEL (0988)75-2168

“専門画材の店”



CULTURE PLAZA

株式会社 **みつや書店**

〒902 沖縄県那覇市壺屋1-1-3 ☎ (0988)63-1650代

パリのサンジェルマン大通りをはさんで、カルチェ・ラタンの反対側に広がる一帯をサンジェルマン・デ・プレと呼ぶ。その中心にパリの教会では最も美しいと言われるサンジェルマン・デ・プレ教会がある。教会の横に大通りと交差する道があるが、その道の向かい側に第2次大戦後サルトル、カミュ、ボーヴォワールら実存主義者達が通った“文学カフェ”オ・ドゥー・マゴがある。古くはアンドレ・ジイド、ピカソ、ブラックらが出入りしていたカフェである。20世紀半ばサルトル、ボーヴォワールがそれぞれ別の家からここへ通い続け、実存主義者達の注目の的になった。店名は「2つの中国人形」という意味で、店内には2つの中国人形が飾られている。



パリの文学カフェ・フロール

パリ生まれのサルトルは、戦後の思想界に大きな影響を与えた哲学者・作家・批判家。高等師範学校を首席で卒業後、高校の教師を勤めながら実存主義の哲学書、小説、評論を発表、当時の世相に受けて彼の名は世界的に広がっていった。その代表作は哲学書「存在と無」、戯曲「汚れた手」、自伝「言葉」など多数。また、参加の哲学(アンガジュマン)の立場から、植民地の独立、プロレタリアの解放のため、常に政治的社会的発言を行った。

すっかり堅い話になったが、リキランヌ(劣等生)の筆者が実存主義の概念を説明するのは不可能なので、高校生用の「世界史小事典」(三省堂)からその定義を引用してみよう。

「実存とは人間が自己を自覚しながら、そのあり方を状況に応じて決定していくことであり、実存を解明する哲学を実存哲学といい、その立場を実存主義

という。」

筆者が学生だった1960年代後半は日本でも実存主義の影響が強く、意味がわからないにもかかわらず、サルトルの「存在と無」シリーズ(日本版)を持ち歩いたものだ。特にサルトルとボーヴォワールの自由な男女関係は、恋愛に恵まれないう運命の私のおこがれだった。

15年前最初にパリに行った時、彼らの活動の拠点だったオ・ドゥー・マゴに行きたいと思って捜したが、時間がなくたどり着くことはできなかった。2度目は無関心になり、忘れてしまった。そして、3度目(1988年秋)はカルチェ・ラタンに宿をとったことから、散歩のついでに

パリの文学カフェ

琉球新報
社会部記者

山城興勝

そこを捜しあてた。何の変哲もないカフェなので、いささかがっかりしたが、かつてサルトルらがこの店で読書や執筆にあたったことを考えると、何ともいえない満足感を覚え、パリ滞在中は毎日足を運んだ。

このカフェは1933年に「ドゥー・マゴ文学賞」を創設、以来多くの文学作品を世に送り出している。コリンヌ・クレリーが演じた映画「O嬢の物語」の原作は1955年の「ドゥー・マゴ賞」を受賞した作品。

私がこの店に行った雨の日、通りを行くパリっ子達はひものついた面白い傘を

持っていた。のんびりコーヒーを飲みながら、雨に煙るドゥー・マゴ周辺の人の動き、風景をながめていると、実存主義者達の姿がよみがえってくるようだった。

オ・ドゥー・マゴの隣に緑の骨組みにガラスを張った洒落たカフェがある。1860年代に生まれた歴史あるカフェで、店の前にあった花の女神像(フロール)にちなんでフロールと名付けている。この像はサンジェルマン大通りの建設工事で取り払われ今はない。フロールは開店当時から文学者達のたまり場だった。20世紀に入ると、詩人であり、批評家でもあったアポリネルがピカソやモジリアーニらを誘い、芸術論を交わしたところでもある。

中でもジャック・プレヴェール(1900~77年)はこの店の常連だった。彼はシャンソン「枯葉」(ジョセフ・コスマ作曲)の作詞者として、フランス映画「天井桟敷の人々」「港のマリー」「霧の波止場」(いずれもマルセル・カルネ監督)のシナリオ・ライターとして知られている。

パリ見物から帰ったある晩に、オ・ドゥー・マゴに寄ったところ、気に入った場所が空いていないことから、隣のフロールに入った。その時、ガイドブックを読んでいるうちに若き日のピカソがよく出入りしていたことを知った。店の雰囲気からしてたちまちそこが好きになり、朝晩交互にオ・ドゥー・マゴとこの店に通った。ボーヴォワールの本によるとフロールは実存主義の仲間達の公的集まり場所で、オ・ドゥー・マゴは私的持ち合わせ場所として利用していたという。

今では、両店とも実存主義にのめり込んだ若者や外人観光客でにぎわっているパリ最後の夜、フロールでエスプレッソコーヒーを飲みながらパリと別れ惜んでいるうちに、この店のコーヒーカップが欲しくなり、思い切ってマネージャーにその旨を伝えると、私のような奇妙な客は他にもいるらしく、新聞紙に包んでコーヒーカップ二組を売ってくれた。貧乏旅行だったので、私自身へのお土産はこれら二つのコーヒーカップだけである。フロールのコーヒーカップでコーヒーを飲む度に、フロールの一面に座っている心境になる。ミーハーはミーハーでしかなく、哲学者とは人種が違うようである。

リレーエッセイ

WANTED!

あなたの広告を待っています。

本紙ザ・ギャラリーボイス ☎0988(34)6760

画廊沖縄情報



90-1



90-2



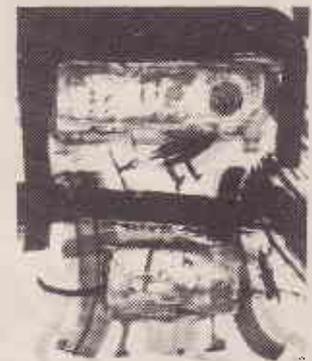
90-3



90-4



90-5



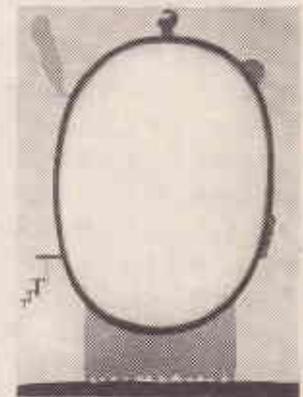
90-6



90-7



90-8



90-9

コードNo.	作家名	技法	タイトル	サイズ(cm)	価格
90-1	ジャンセン	石版	二人	47×66	¥ 450,000
90-2	ゴリチ	石版	花	65×48	¥ 140,000
90-3	ブラジリエ	石版	競馬場	90×62	¥ 1,200,000
90-4	幸地学	油パステル	a, moi	66×49	¥ 200,000
90-5	ギヤマン	石版	このバイオリンはブケ	56×42	¥ 170,000
90-6	伊江 隆人	墨	森の仲間たち	65×53	¥ 150,000
90-7	デペルト	石版	シャンクゴのゴルフ場	47×66	¥ 180,000
90-8	和宇慶朝健	シルク	波照間	90×60	¥ 125,000
90-9	元永 定正	シルク	あかいだえん	46×66	¥ 120,000

◆その他、県内外作家の作品を数多く取り扱っております。どうぞお気軽にお電話ください。
☎0988-(34)6760 画廊沖縄営業部

ギャラリーウーマン

ある絵との出会い

画廊に勤めて1年になる。さまざまな絵画を通して画家の人生や思想、そしてメッセージを知る機会に恵まれた年だった。私の中でまた一つ、新しい種が確実に芽を出して“生”の息吹を感じ始めている。その一因となった画家を今日はご紹介したいと思う。その名は「ルオー」。彼は元は絵ガラスの職人で、フランスにおいて、20世紀初頭に、ギュスタヴ・モローの師事を受けて本格的に絵の世界へ入った。



ルオー作品「母子像」

私がルオーの絵に初めて出会った時の印象は強烈だった。1927年完成の58点からなるモノクロアquareン「ミゼレーレ」の一つだったが、その深淵な黒く太い線と少ししか見つけることの出来ない白の部分。まるで、じっとり湿った鉄の牢獄にいるような感覚を与える絵だった。

“受刑者は逝きぬ”というタイトルの項垂れた男の絵は、悲しみ、絶望、無力、罪を連想させた。何て暗い、でも何という自信を持って描かれた絵だろう…と私はその絵の前に釘づけにされてしまった。それまでは、ルオーという画家をあまり知らなかった（実際に絵を見る機会がなかった）ため、その反動で私はとたんにルオーを注目するようになった。

ルオーの画集によってある程度の私の空腹感を和らげることは出来たが、本物の“ミゼレーレ”全作品や油絵を実際に

この目で見たいという切望にかられてしまった。彼の人生観はキリスト教に深く根ざし、また彼は生涯を通してよく娼婦や道化師を描いた。娼婦は荒唐した人間社会の餌食となってしまった人々への同情心の表れであり、道化師は悲しい歯車の一つを担う人間を表している。私の胸に熱いものを残したルオーの言葉を、ここでご紹介したい。

「ある夕暮に、天空に輝く一番星が…なぜかは知りませんが…心を締めつけて以来、私の心から無意識にも一つの詩情が流れ出ました。道端に止まっているあのさすらい人達の車、貧しい草を喰むやせこけた老馬、馬車の片隅に座り、さらさら輝くけばけばした衣装を繕っている老道化師。楽しませるために作られた派手なまばゆい物と、少し高い所から見れば限りない悲しみである人生との対照…、さらに私はこれらの全ての思いを推し進ませました。道化師、それは私だ、われわれだ…ということをはっきり悟りました。私たちは皆、金ピカ衣装をつけているのです。それが国王であろうと、皇帝であろうと、私の見たいと思うのはその人間の魂なのです。彼が偉ければ偉い程、人間的な栄光を与えなれていればいる程、私は彼の魂のために恐れを抱くのです。」

ルオーは物質的肉体を取り払った後に残る魂として人間を平等に見つめていたのだ。だから、精神的幸福とはかけ離れた人間社会の歪みを痛烈に感じていたのだろう。彼の絵には、「本質をさらけ出してやろう」という意気込みを感じる。

真の幸福とは何かを別の面から追求したルオー。彼の絵の少ない白の部分こそ、ルオーの表したかった理想の世界があるのではないかと思う。面々の大部分を覆いつくしている厚く黒いその色を通り抜けると、そこには、キリスト教という輝かしい神の王国が広がっていきそうな気がする。これを決定づけた絵に、私は好運にもつい最近ある方の自宅で見る事ができた。それは、“ミゼレーレ”の最後の絵であるキリストの顔だった。あらゆる苦しみ、悲しみを乗り越えた、半眼のキリストの顔だけが画面いっぱいに浮いている、悟りと情寂に満ちた神々しいものだった。時空や宗教をも超えて悟りかけてくるルオーの絵。彼（の絵）と出会えたことは、私の生涯の宝物となりそうだ。（玉那覇 弘子）

浦添美術館

二月初め、待ちに待った県内初の美術館、浦添美術館がオープンした。早速仕事の合間をぬって出かけてみた。周辺の整備がまだ整っていないらしく、工事中ではあったが、緩やかな坂を下りて行くと琉球王朝をイメージした魔か不思議な建物が見えてくる。微妙に戸惑いながら中へ入る。真っ白な壁面に高い吹き抜けから光を十分に取り入れたロビーより、企画展の作品を見ながら期待の常設室へと向かう。常設室は、作品保存の為に照明を落としてあり、和らかな光の中で見る事が出来る。そして改めて触れる琉球漆器の世界は、正に素晴らしく、感動を起こさせてくれるものだった。その一点一点の作品の中の自由で繊細な模様と深い輝きが、琉球王国の豊かな文化を見せてくれた。貴重な美術品を目録等では知ることが出来ても、実感するチャンスは少ない。そういう意味でも当美術館設立の意義は大きいと思う。

もともと沖縄の人々には、音楽や詩、絵画や書、舞踊や芝居、そして工芸や武道など、独特な表現の世界があるが、寸断された歴史により、本物の良さを知る機会に恵まれず、不得手になってしまったのではないだろうか？日常生活の中で沖縄の美術文化を本物を通して見る事が出来るのは、私達の文化を知り、自信を持って伝え興して行ける大切な一歩だと思う。これからの美術館の充実した企画展や作品収集に期待していきたい。

（瀬底 貴子）

編集デスク

かつて新人類とか、超人類（？）とかの言葉が流行ったが、新世代の作家達にも同じような事が言えそうだ。今回の金城氏のインタビューで感じた事だが、インプット、ノイズ、情報、DNA、気体、におい、電波、管理といった言葉がポンポン出てくる。現代社会をとり巻く多様な環境が、金城氏の高感度センサーにキャッチされ、アミダくじのように複雑に関係している情報や因子を美的視点から科学的に考察している、といった感じである。もはや現代美術の作家たちには、文学性や思想性は過去のものかも知れない。（上）

Adlib 広告制作事務所
アドリヴ

〒901-21 浦添市宇勢 527 ☎0988(77)6535

ART GALLERY OKINAWA

絵画(油彩・水彩・版画)の専門店

画廊 沖縄

〒900 浦添市浦添2-1-1 ☎098-932-2111